教育プログラム　天理大学

日時：2014年12月22日（月）9:00～10:30
場所：天理大学　杣之内キャンパス研究棟3階　第一会議室
演題：「東南アジアと国際関係」
講師：ワン・グンウ（シンガポール国立大学上級教授）

東南アジアはやや複雑な地域ですが、今日、その重要性は高まっています。現在の東南アジアは10カ国からなります。1967年に、このうちの5カ国が一緒になり、東南アジアの共同体ASEANをつくりました。現在の10カ国となったのは90年代の終わりごろですから、まだ若い組織です。

このうち、タイ以外の国は全て西洋列強の植民地でした。第2次世界大戦が終わって植民地解放の時代に入ると、タイ以外の9カ国それぞれが新しい国づくりを始める必要が出てきました。同時に、アジアにおいてインドと中国という大国が出現しました。そこで、東南アジア10カ国は、小さい国同士がまとまって新しい大国に立ち向かうことにしたのです。一つ一つの国が国家建設をしながら、その一方で共同体をつくるのは相矛盾しているところがあり、両方を成し遂げるのは簡単なことではありませんでした。

まず、10カ国のうち5カ国は島嶼国で、大陸側の国とは歴史や政治・経済体制が異なります。さらに、東南アジアの民族の多くが、古代に大陸から海を求めて南下していった民族であるという背景があります。つまり、大陸側の圧力が島嶼国に住む南側の人々を打ち負かしていったということです。大陸から来た人々は陸に国境を引き、国境をめぐって戦争してきましたが、海洋の文化を持った人々は非常にオープンな考え方です。このように東南アジアには、オープンな海洋的な考え方と、土地に基づいた大陸的な考え方の二つが存在しているのです。

東南アジア各国は、植民地から解放されたとき、ヨーロッパ諸国のように国民国家として独立しようとしました。国民国家という考え方は、大国として力を付けたヨーロッパが生み出したものであり、東南アジアにとっては特異で新しい考え方でした。国家間の関係は今や国際体制としてグローバル化され、東南アジアではこの50～60年の間に、このような変化が全て起こったのです。

非常に興味深いのは、東南アジアでは国民国家という考え方が根付いていないため、今なお影響力のある地域の形成途上にあります。共同体という考え方について、東南アジアの方がオープンなところがあるので取り組みやすいでしょう。また、海洋諸国は主権や国境の問題は解決しやすい一方で、大陸側の国々は陸上ならではの問題を抱えており、海洋諸国と比べると難しい面を持っていると言えます。

東南アジアは今、重要性を高めています。国際体制における経済的発展の観点から見ても、海洋国はうまくいって、大陸国は難しさを抱えています。グローバル化によって、海洋国の開放性や海上交易による経済的繁栄、大陸国が持つ閉鎖性や制限といった違いが明らかになっています。今後、海洋国と大陸国がどう協力していけばいいか、もし東南アジアの直面するこうした課題がうまく解決されれば、世界的に教訓を学ぶことができると思います。

一方、中国やインドといった大国は、海洋国から学んで、海軍力に一層着目しています。海洋とのつながりを通して、さらに経済力を増す必要があるからです。海洋の勢力はこの200～300年、大陸勢力に勝ってきましたが、今は大陸の勢力が海洋に関心を持ち、勢力を高めようとしているのです。

東南アジアは、こうした海洋の強みを持つ二つの勢力に挟まれています。そして、東南アジアの中にも海洋側と大陸側の二つの勢力があります。アジア全体の将来の展望は、東南アジアがこの新しい環境において、地域の安全保障や経済発展の課題にどのように取り組むかにかかっているのかもしれません。